

者茶リ酒宴
 二月廿五日午鳥坪内堂三郎加細祭礼ニテ茶屋又ニ工門方
 江行カ不命右同所ハ新編國源ソレヨリ高國大和巡リ大垣ヲ
 リ朝船ニノリ桑名ニ至リ伊勢桑宮大ヨリ踏路月平ヨリ入ル
 伊賀上野城下諏訪場所ニ同歌馬荒本又ハ五郎大ヲヨリ桑名内者
 在菅原生地談談隆寺之田社別上セ也唯ハ開祖ハ船多ク以テ寺
 深井寺當無寺三輪社神祇計リ長谷寺多武峯經成ノ社也
 大積冠嶽吉野嶽ト古水院此寺ニ業業織田起守美登經成ノ社也
 在之半變カ分義程

一 三月頃江戸ニテ茶元坪内石見守重前守ト改名
 一 三月廿六日濃利平嶋村坪内金三郎島園堂十勢女常祀五
 ノ月日ナリ

一 四月十八日年号改元應元年ト被 仰出候
 一 閏五月十二日尾州起宿御治リ 將軍家茂公起街道御通行
 長列爲御儀仗ト御陣羽織御首用洲保宿ヨリ大垣中山道香井
 宿へ出曉別館詔御起遊遊洲茶元坪内堂前寺是益供奉也
 一 五月學見郡以早稻葉芝居小屋へ大虎老延見世物御取入ニ願
 遊針凡又一所ニ奇吟ノ類十羽程見セル五色音呼連产音呼
 一 十一月頃石虎ト同ト所へ大家茶元坪六尺四圍程ノ形ノ鼠色
 遊年約乘ル其後駱蹄ト又セリト云々小蛇 在如蛇
 一 閏五月十七日午ノ刻前後大和人語ニ制ニテ不台程、強而

ニテ是迄不覚一二時ノ間也當園羽堂郡茶野村字高瀬堤越シ
 知レ登九ツ半時頃也又登八ツ邊頃前渡村字下加前河原堤加
 レ表標上水四尺程貞工之上水毛尺二寸計リ蚬毛登七ツ時
 廻大水夫ヨリ三宅村堤物モ曳漕水對夜ニ落標下迄ヒツ翌朝
 多分ヒツ保水ル々ハ在之其後急ク是迄キ表ノ標上並来リ候
 奥ハ一度標上ニ付候門前南ノ堤味ト未野村境邊河ニ夕筋ニ
 流レ幾野村裏ト本島村前ト合流シテ一筋ハ平嶋村ノ中ト島
 六七月頃一度水尾留々アリ出水ニ知ル九月頃全クミヨ留ニ
 相成候古今亦嘗有、大水也寛政十戌年ヨリ壹尺七八寸モ
 水高シ也此時三宅村ノ御テテテテテテテテテテテテテテテテ
 其時、奥ノ標ハ表ヨリ一尺二三寸程低シ奥ノ上ニ掛中ハノ間
 柱ニ印シ塞ニ而符ケ有之エト上曲尺狀尺程上ニ在之候

一 六月九日五日午鳥坪内高園堂十勢女壯身ニ身四里名古屋へ
 行細其後上至經江行當地ニミ留、儀ナレ不安心ニ分テ也
 一 八月九日晴未丑定、日晚六ツ過五卯、上利坪内金三郎高
 園本堂十勢女本産男子能生餅三郎ト名付ク高園三男也十々
 月ニテ出生大水ニテ旧里兒當茶孫太夫忠良上屋敷外岸端伊
 勢町康角三運留同所伊勢町康角三運留ニ越出生
 一 九月十三日坪内高園堂十勢女餅三郎歸宅
 一 九月十九日坪内餅三郎宮祭氏神奉納三社鎮守へ祝酒宴
 一 十月八日江戸ニテ茶元坪内河内守保之京都へ急御用被
 仰候同十三日全定
 一 十一月九日坪内餅三郎百十日ニ而等柄祝
 一 十二月五日江戸茶元坪内河内守奉改名額書差出テ即日願
 一 閏五月廿六日江戸茶元坪内保之ヨリ大水見舞ニ外樽者ニ
 重泰比ナリ

十一月十五日坪内鎮次襲置稅
 同二丙寅年
西曆一千九百零九年
 二月七月初植埴内鎮三郎
西曆一千九百零九年
 青木重政於會町町家二同十八日酒湯祝
 今本正月為年始二三井坪内定致出府之處二平以前ヨリ
 絶交ニ付日限レセ
 一月廿五日平嶋坪内高國三男同姓三郎和機建レ
 一月廿五日坪内鎮三郎和朝句況
 一月廿九日坪内鎮三郎疑主罷
 一月八日夜大風雨
 一月八日頂直忠塚録帥ヲ以テ尾列分江昨丑年ノ水難
 大難逃ニ付坪内鎮三郎出府柳年寄小瀬前大郎殿御取扱ナリ
 御間濟御藏茶五拾石壹俵ニ付五斗五升入ナリ排積 仰付
 徳御子元金五拾兩頂戴被 仰付買加至極難有任奉存候次
 壽也同月十二日御奉殖川前ヨリ於廻レニテ當国相衆部無如
 寺村へ着候也、内玄米數拾五石平嶋村百姓江管渡入レ云
 的ニテ并ニテハ、如ク庄屋年寄共罷出美圖ヲ成レ入列公江年
 社ノ燃燈ニ得正事江着屋敷ノ九五石ノ内ニ三條遣入
 右年賦件借面三年返上ノ如十分一ノ現米ニ相成候ニ付尾列
 羽濃郡北方村陣屋ヨリ應對在之ヲ後仰用格ニ相成候
 一月十三日武列江戶概町貝坂住居坪内帯刀定永病死行年
 六十八歳漢名藤兼院殿曾殿長太郎土塚坪内高國安見ノ弟
 一月廿八日各務郡新加納村陣屋ヨリ江戶ニ於而家元各旦
 那坪内當前守事處彈守ト改名
高城郡新加納村陣屋
 十月十九日坪内高國鎮次江出立
東海道新加納村陣屋
 下向家元之ヨリ、舊村對泰極、大坂本ヨリ、又江戶へ進レ也
 引次出府河高寄、兵隊四人、新張、引連レ候也、三人者出来也

老人不足之憂ハ江ノニテ甚敷候積、右三人者漂列存見郡
 加納永井肥前守藩中間戸氏舍身同姓源五郎當國名務郡前渡
 村子 平民藤丹相氏舍家聚十郎先年京州高雲、從レテ、
 致前江出凡三可急電者、先生抑レ先テ同レ歸ル今年九
 六歳家東宮、舊時如以上三人兵隊也、同廿八日晝年ノ中、別頃江
 止市ヶ谷御門内三番町家元坪内保之屋敷内北長屋へ到リ、皆司
 年十二月十七日坪内高國一人出立東海道筋道行シ、舊時如、
 知代今月跡跡方同廿七日晝八ツ半時頃、湯首、碓、以、
 年十二月廿五日、五、日、頃、手、三、油、井、凡、中、所、
 屋敷へ、如、大、戰、平、五、命、敵、三、重、後、レ、油、へ、落、テ、
 薩藩兵勢、出、入、深、五、命、敵、三、重、後、レ、油、へ、落、テ、
 同三丁卯年

一當年坪内高國出府、如昨冬、孰隊召連ニ付家元(賴字年)
 出府新置候ニ付出府懸之候
 一月四日出代リ坪内鎮次即乳母安八郡墨敷本民墨長也
 佐野ノ首尾健繼、又文久三癸亥年八月十五日ヨリ奉公仕候
 一月廿一日前渡坪内壽兵衛、壽同人舍身、欽次即密村、昨冬
 十月孰隊召連出府、如、漢子大砲煉筒、儀申上置候ニ付家元
 係之ヨリ其節へ申上ニ相成候、ヲ、賀、目、録、持、
 儀、森、村、
 方御見遣キ深川越中嶋ニ於テ相濟候也、舊時如、
 一六月金百両五拾之者ヨリ、爲金、
 右目付差上ルニ依而、
 惣代ヲ基所江罷出、
 一、
 儀止ム

一二月九日三井村住坪内拾太即足致赤山道總督老御快頓
 御開濟御隨從仕同年五月壇村又無程上京大同年十月江
 戶一行江戶住居
 一二月廿三日漢列各務郡府加納村梅村屋三而東山道總督舟
 副總督江坪内高國御機嫌伺上之參上拜弱被仰付候而退
 出入坪内高兵衛昌壽同參身監物向人取立三件罷御付浴春
 殊小御隨從大砲五門、支配被仰付候坪内拾太即御隨
 身仕候中仙道御通行ナリ
 一三月九日本曾路通行途中ヨリ名古屋江行ク家元坪内伊豆
 守應居シテ逸堂ト改名入養子飛騨守定益今度家督相續致シ
 勤王ニ付罷越入尾列名古屋京町入井市兵衛方藤高勤王
 趣申立候得共明然氏不致漢列各務郡新加納村陣屋ニ於而
 謹慎五十日程被仰付候

一四月七日家元坪内飛騨守定益尾列古屋ヨリ謹慎被仰
 付候ニ付テ漢列各務郡新加納村陣屋へ到着
 一四月廿三日坪内高國各務郡新加納村陣屋江罷出候躰一尾
 持參坪内飛騨守入陣之悦也回會又
 一六月十一日坪内高兵衛昌壽江戶ヨリ京都入行ニ付テ奇心
 一六月十三日坪内高國同昌壽當國目京都笠松村元陣屋江出
 頭先日京都ヨリ堂上方大京中納言殿仰出候ニ付御機嫌御伺
 一同月九日坪内昌壽京都へ出立

一正月朔不當國各務郡新加納村家元陣屋重役小嶋市兵衛
 兵衛御下中屋村住人元平出立手代今尾栄之物爆刺各務郡
 子能州石西人當國屋見郡加納高堂上鼓小路殿御本陣江罷出
 候御用金五百兩下發炮五挺被仰付候其後上船也御受取書
 下止坪内一航、割符也詔ニハ在之在傳傳物ニ杯寄儀ナリ江
 一正月十八日、風聞當國不及郡岩手竹中圖書之如陣屋ヲコ
 小千重察テ強迫シ乱巧極々也又當國大野郡揮笑岡田懸之助
 陣屋江火ヲ放テ又中、元陣屋ト有放火之趣鼓小路殿江并殿
 摩見郡加納沼へ被泰候ニ付大騾勒四五日逗留ニテ鶴沼、方
 江被參夫シヨリ尾列名古屋榎森候由右ニ付同月九日暮六
 時頃ヨリ當家坪内之家族六漢列羽東郡松倉村字牛子平兵
 衛小千重彦七ト申テ、方江立遊シ同廿五日夜歸村出立ニ并
 浦工門分家ニ行同廿四日加納沼ニテ申、上列項ヨリ日
 入頃迄大砲ノ音殿數聞へ申候故小路殿江并殿へ御目ニ懸
 中候由翌廿五日惣勢鶴沼沼へ出立

一八月朔日今晚子、中列項前渡坪内冬有定能室轉性況高元
 八十四歳満名辨性陰殿圓圭妙智大姉同四日六、列過出程屋
 敷ノ北ニテ門外字長根山、半履持墓ニテ火葬
 一八月十二日尾列公江御伺、上家元坪内飛騨守定益上京榮
 定同入分家江戶稅町貝坂住居坪内恒太郎親清祖テリ心切地三
 也今般將軍之病死及母ヲシテ上京ノ性ヲ德孫孫相傳テ入徳序
 飛騨御醫官今年十七歳喉養子トシテ奉旨相續入當春坪内飛
 騨守ト同道謹慎知行所漢列羽東郡大佐野村御神トハ得宗
 寺ニ於テ又此度坪内飛騨守ト同伴ニテ上京
 一八月十三日尾列公へ伺、上坪内益三郎高國候、上列項在
 足中山道同行同十五日申、中列過京首今出川通上七軒町真

從六位 中宮様御取次山幸太即自分ニ又世判宮殿御取次
 近藤恭中御門長官殿御取次中嶋警衛
 一十二月十五日晚八ツ時出立坪内松太郎藤原定年上京中心
 道筋通行同十七日昼四ツ時頃京者寺町通り四架道場盃蓮寺
 塔頭南涼院ニ寓居（依宮警衛中左字奈波敷講堂警衛同警衛殿）
 一十二月九日歳暮御祝詞ニ南田（御祝詞ニテ御用出サレバ）
 御使番ヲ以テ大手札ニテ天機御同奉申上候 中宮様へ同
 様奉申上候夫レヨリ 大宮御所同断奉申上候之自分ニ形錄
 羅長官殿へ理加ナリ
 一十二月九日四旗下與分ニ至上地被 仰付候而十分一
 度此板行バリ奉ニテ様製之御書付ニテ被 仰出候而井史生
 殿御流シ也當奉年崎坪内高國者現茶四十五石下孩儿御書付
 而、本拔書キ九ノ通り元禄六百石赤満四百石造十五石右
 被 仰出候現茶ニテ被下候在當奉、此ハ是造、如ク被下置
 候初ニ薩別長列古州ヨリ版籍奉還ノ申領地盡ク返上仕候ニ
 付大各小各共皆差上候其後 朝廷ヨリ十分一ノ現茶ニテ大
 台方へ下賜右故本石以上以下共上ヨリ様制被 仰出上地被
 仰付候坪内高國今日御許立ニテ而出頭仕并茶入高家並ニ又
 代寄合中大夫ト号萬石石以上ヲ下大夫ト号萬石石以下
 上士ト号年カヲ中士ト号同心ヲ下セト号又右ヲ今殿被廢テ
 千石以上以下之中下大夫土境不福ヲ被廢止士族廢稱亦給ス
 大小名ヲ華族ト稱差上方モ華族合方ニ被置被ト給ス又攝多
 包食非人野合番人等平民ト成テ攝多官食又者懸令ノ被允是
 達京帳三入ヲザルモ、戶籍へ入リ平民ト成ル
 同三年庚午年 閏十月小
 一正月九日朝儀、上列以奉 別關頭坪内高國者用察斗自森

上預侍老人輩履取宣秋門殿門ヨリ、門番へ手札出入仰候
 處ノ御下殿ヨリ昇降茶奉ニ刀ヲ持候觸下着席上下馬前子
 直當勝手次第也唐順書付 御沙汰ニ付差上ル元上士之令上
 八台帝威ニ並テ觸頭ハ別殿也信康中御沙汰ニ付差上ル御沙
 觸門ハ下殿ニ付其殿御座ニ二儀ノ御座ニ付差上ル御座ニ付
 判項相濟也史生、人其帝ニ至リテ差圖、御行ニハ下及由
 年始、口上ニ差圖ニ初ニ中大夫次ニ下大夫其次上士此先
 觸頭惟御流之違家奏野上本三郎ト申入置入也此御座ニ被
 一歳乃下不詳也今日高國御座ハ即ニ符落奉リ左觸頭、此
 ニテ帝帳ノ書付ヨリ上上擊ニ儀ビテ人々探出入關外ニテ
 奉代ニテ立テ入リ席ニ行ニ並存左儀也觸頭御座ノ御座ニ御
 于面其直上ノ間ニ二儀觸頭御座ニ御座也史生、人儀觸頭御
 此右ノ御座ニ觸頭士族觸頭坪内金三郎其外士族之面ノ上呼上
 此下坪内盆三郎高國平次仕候子申上候ハ
 天機御同奉申上候此且、年頭御祝詞奉申上候此下演台ノ
 卜其終下坐ヨリ立テ關ノ出テ奉代ニテ立テ元席へ引退ク
 赤ノ上列項相濟其レヨリ 大宮御所御到入也御座ノ御座ニ
 是降入御座ニ付是江年始御祝詞申上候御工ノ中宮様へ
 年頭御祝詞奉申上候夫レヨリ御留守長官中御門長官殿又世
 判官殿江年頭御祝詞申上候御座ニ付御座ニ付御座ニ付御座
 之御下殿ト云ハ御座間之直向御座ニ付御座ニ付御座ニ付御座
 是ヨリ上士、而、御座間之直向御座ニ付御座ニ付御座ニ付御座
 士族年終中大夫下大夫上士ト共 此カニ奉降者如石之也
 一正月十七日夕七ツ半過頃京都府ヨリ始テ御使令、坪内高
 四條河原町下小西屋入被入候御座也即判高國出頭夜ニ入ル竹遊
 江招カレ留字直辨小西屋入被入候御座也即判高國出頭夜ニ入ル竹遊
 警衛所又町末へハ京都へハ合儀又留守御座ニ付御座ニ付御座
 元警衛所也
 薄也被申候ハ今日留守官ヨリ京都府江引渡シ相成ルニ付社
 夜ニ觸頭候引 戶籍總奉至急取調候様御申付驗形本一冊御渡

四領地美濃國羽栗郡平嶋村二居住は度敗先達而奉徳殿候罷
而者同國空松縣管轄之儀ニ御座候右若 御沙汰ニ付取調奉
左上依以上
嘉永元年四月十九日
坪内金三郎
御役所

一四月廿七日士族元下大觸頭内藤忠節宅ニ於テ御流シニ相成
候御書付坪内金三郎罷出頂戴仕使坪内金三郎是迄之儀儀差
免候事四月京都府評

一四月廿九日四領地江出立領書内藤忠節様迄へ差出テナリ

令般四領地美濃國羽栗郡平嶋村津屋住居額之通り 御聞齋

藏成下難有仕合奉存候右ニ付来ル五月朔日 當御地出立仕
候此殿 御辱申上候儀之 御添書 御下流被成下度奉願候
以上午四月廿九日 村越三郎觸下坪内金三郎 御役所

一同日 御添書 御下流ニ付内藤忠節宅ニテ受取申候

一二月十五日觸下ニ由着四領地住居而人頼書産出外ニ由
京清一郎 御添書 長谷川甚兵衛 御添書 大嶋金
三郎 御添書 御下流ニ付内藤忠節宅ニテ受取申候

一二月朔日坪内松太郎三年遠列得京郡平嶋村へ戻、上列
項出立供用人松塚録辨此項入京之儀今日供ニテ引取候同十

七日歸善

一五月朔日坪内高國卯ノ申割刺西京四糸道場金蓮寺跡ニ珍
頭南涼院覺尼供岩塚酒之助中玄字半次ヨリ平嶋村本郷奥屋
敷住朝光九郎元徳ニ於テ八月朔日於同平嶋村取立候儀之由
供三ノ御辱申上候儀之由出立之時内藤忠節方へ立寄御書差出テ不
下區申上候儀之由江野村方へ立寄御書同四日午、上列相栗郡遠松村へ着
八ノ御辱申上候儀之由京郡府江被 御遣候下、御各也初ニ下彼河
落手、趣願ヨリ京郡府江被 御遣候下、御各也初ニ下彼河

合新十郎殿為出テ也引取候儀 御辱申上候儀之由江野村方へ立寄御書同四日午、上列相栗郡遠松村へ着
次即方江罷出暮合時宿へ引取此此へ廻ニ松太郎三年如く
來ル正茂ノ時項出立馬上也無動寺村ヨリ米野村度カ、リ而
軒中村江向テ六ノ半時段歸宅

一六月五日辰ノ刻杜刺尾刈家知郡名古屋特置屋敷住居同所
ニ於テ而前栗右膳源正立揃子誕生甚弥ト名付ク母ハ奉室迄也
坪内高國ノ孫ナリ

一六月三日於西京二坪内高國御用召ニ付為名代ト於西京ニ
士族觸頭内藤忠節ヨリ御下流被成下度奉願候儀之由出立候儀之由
御發調書通達ニ御用料トシテ金百八拾兩被下置候旨知事長

谷草相殿被 仰渡儀之長谷草相殿杜村松田大冬事江御礼廻
勤相勤被買候趣内藤忠節ヨリ申越テ西京出立前内藤忠節被

申候ハ若シ御用ノ節ハ其毛ノ方江御沙汰可申趣被中西京ニ
於而知ルハ無之哉ト被申候ニ付四糸河原町下止東側小西

屋又兵衛ト申舉緒尚書致シ候モ、私家朱ノ燈キ、趣申置候
ニ付内藤其命ニ於テ而手帳ニ被留候今度右方へ内藤ヨリ沙汰

ニ付右小西屋ヨリ四日ニ住立飛脚ニテ同六日夕刻鹿脚到事
翌七日忌塔録轉上京同十三日歸村御發調御書付並ニ御金百

八拾兩御目録相添交取來ル御礼書内藤忠節宅ニ奉書震台
紙産出テ又同ノ送受取書通達也坪内金三郎昨年来格別勤

精相勤候殿神妙之事ニ候依而御用之十七日録之通達之儀奉
六度月京郡府一筆啓上仕候然者私儀不奉存寄奉書御發調書ニ

為御用料金百八拾兩頂戴被 御付算加至極難有仕合奉存候
右御禮奉申上度如斯御座候思惟被言六度月内藤忠節及坪内金

三郎 御辱申上候儀之由京郡府江被 御遣候下、御各也初ニ下彼河
下置候 御金書面之通請取申候儀迄而如件明治三庚午年丙

藤忠節及坪内金三郎 御辱申上候儀之由京郡府江被 御遣候下、御各也初ニ下彼河

一九月十九日夜大風雨
 一九月廿一日頃菅國上津郡多良郡宮村一坪内金三郎高國同
 長吉松太郎定年供侍岩塚清和壺人呂達一宮松縣一御席ノ上
 罷出候沃田村者一御致之壺方へ之寄置後平家高木殿事
 願上御意遣下り而宗三子格下加己下成心夜四ツ時候親
 願島本願具深方一行蒙懸下り一泊入夜四ツ時可頃高
 亦逢三神貞壽寺江春山轉々懸下り一泊入夜四ツ時候親
 以有奉公入身見部水邊三所懸也高木殿家ノ方也七年經
 リリ引取一負教ト去陸居、言不知夜四ツ時頃々懸下り一泊入夜四ツ時候親
 方江引取一負教ト去陸居、言不知夜四ツ時頃々懸下り一泊入夜四ツ時候親
 歸宅願寺三神貞壽寺江春山轉々懸下り一泊入夜四ツ時候親
 上野國武石長谷川志兵衛赤丸留守故引取松茸持集
 一九月廿三四日西京ニテ關下當國不破郡大石村住居石鳥
 上野國武石長谷川志兵衛赤丸留守故引取松茸持集
 同四年未年
 一三月上旬頃望松縣江歌願知事長谷部君奉思連殿思呂ヲ
 以テ金子内侍侍被 仰付候証書差上候昨午分ハ未年分
 定銀ノ元高ト不念ニ付御取調中ニ付御下テ進無之由也金貳
 百兩并侍仕雖有江合ニ奉存候
 一昨丹年冬ヨリ臣岩塚録輔吉歌江志人扶持半々可遣言申渡
 久長迄、勤勿且八月向、節八遣行候ニ付テ也
 一七月九日巳、刺望松縣ヨリ柳春喜到表昨八日仰也御用之
 儀有之則明九日五ツ半時出頭可有之候也辛未七月八日望松
 縣一坪内金三郎及石三行即出頭、屬并出大 殿ヨリ
 仰書付一通御渡シ其御懸要爲士族坪内金三郎孫高之儀天保
 慶卿銀面五百六拾七石六斗ヲ以孫割ニ當現米四拾五石爲家
 孫 下賜候奈御申渡可有之此殿相違候也辛未六月辨官望松
 縣一坪内金三郎別紙之通被 仰出候奈此殿相違候事辛未七
 月望松縣辨官御言ナリ又云魯六月加余也引借リニ付
 下候証書御差候也

一正月十六日當國相衆郡松村元理方森川求次郎重愛初ヲ
 入衆覽應ス
 一正月十六日ヨリ交關向敷コボナ三掛川當本嶋村百姓共へ
 拵代金六十兩也
 一正月十八日晝薩向敷コボナ三掛川並三南高塚山内共當年
 嶋村ノ者江掃又羽家都下印食村ノ者買受ル由代金三十五兩
 也棟札ヲ某處年中姪子高國病氣ニテ一寸見タル俤从關へ差
 置セ五六日ヲ經テ見ニト存尋候得不知不思儀殘念ノ事也
 一二月下旬慶當國厚見郡幸嶋村 治郎右衛門一拵代金十
 六兩此頃取コボシ
 一八月四日夕七ツ半時頃尾列ノ古皇特監至次居船葉石懸
 妻庭女婦男甚殊達シ乘ル甚弥年歳ノ出主二歳也同ハ日輪
 葉古膳來比初テ也同九日望車輪銅見物右膳片警女松太郎鏡
 次郎御三郎等也夜明テ歸ル同十三日右膳片警女志歌名古皇江
 歸ル尾列一ノ宮遊伴等並ニ荷物五勝長八此頃土屋干宗子
 又之知リ箱入外ニ喜久屋發號名古屋長者町六丁目也極上製
 敷花也今定目ノ製也實候又換行ニ燒箱敷セテ甚殊江侍儀
 ノ馬ニ乘タル面筋ニ奉遣入ナリ
 一九月五日願磨ヨリ御布告也一散髮則殿恩腹靴刀共自今可
 寫勝手事但禮服之上而帶刀可致事一平民儀高袴羽袴等用
 可爲勝手事一筆族ヨリ平式ニ至ルテ區ニ替納被具件候奈
 儀方願ニ不及其時之ノ長江河居出事但送籍之儀ハ一掃法第
 八則ヨリ十一則マテニ照准可致事辛未八月本政官
 一十二月 望松縣ヨリ赤米踏置候ニテ望松縣職詩方之
 可申御沙汰ニ付皆々家夫少々免年當應之歸置爲候也三代
 以上三代以下、家奉旺年冬重不出御年當ニ不願置歸置也
 是ニ取置候也、以テ二年踏置迄也、年ハ成程ナリ

編集後記

当歴史民俗資料館では、市内に伝在する、歴史資料の復刻や民俗資料の資料目録を資料調査報告書として発行しております。今回の報告書二十号は、十六・十七・十八号に引き続き市の文化財に指定されている坪内高國編集の系図を影印復刻いたしました。この文献は、江戸時代から明治にかけて郷土に生きた人々を知る重要な手掛かりになると同時に、「内分寄合」という本家と内分の三つの分家をひとまとめにして、旗本としての代表権は家元である本家がにぎるといふ特殊な旗本の様子を知ることが出来る資料です。こうした貴重な資料をぜひみなさんに公開し、知っていただきたいという願いで復刻することにいたしました。

当巻には明治維新後の平島坪内家の由緒と平島坪内氏の宝暦以降の記録と日記の一部を取録いたしました。分量の都合により残りの部分は第五巻で収録する予定であります。影印復刻の形態をとりましたのは、楷書体のためわざわざ活字化しなくても判読可能なこと、及び活字化の作業過程で多数の手を経ることから生じる誤植の危険性を極力避けたいと考えたからでございます。

史料解説は、富樫庶流旗本坪内家一統系図並由緒から読み取ることできる、士族階級であった坪内高國・銚三郎の日清戦争の体験と見聞の記録が持つ意味を、「日清戦争と坪内銚三郎」という標題で大垣女子短期大学助教授の佐藤政憲氏に執筆していただきました。

この報告書も、既刊の報告書と同様多くの方々にご利用いただき、地域の歴史や民俗、よき文化的伝統の再発見につなげていただければ幸いです。

最後になりましたが、影印復刻を快諾いただきました少林寺ご住職の久司宗浩師をはじめ、この報告書の刊行に際しご協力ご尽力いただきました多くの方々へ深く感謝申し上げます。

平成八年三月

各務原市歴史民俗資料館

館長 藤井 弘道

各務原市資料調査報告書第二十号

富樫庶流旗本坪内家一統系図並由緒(四)

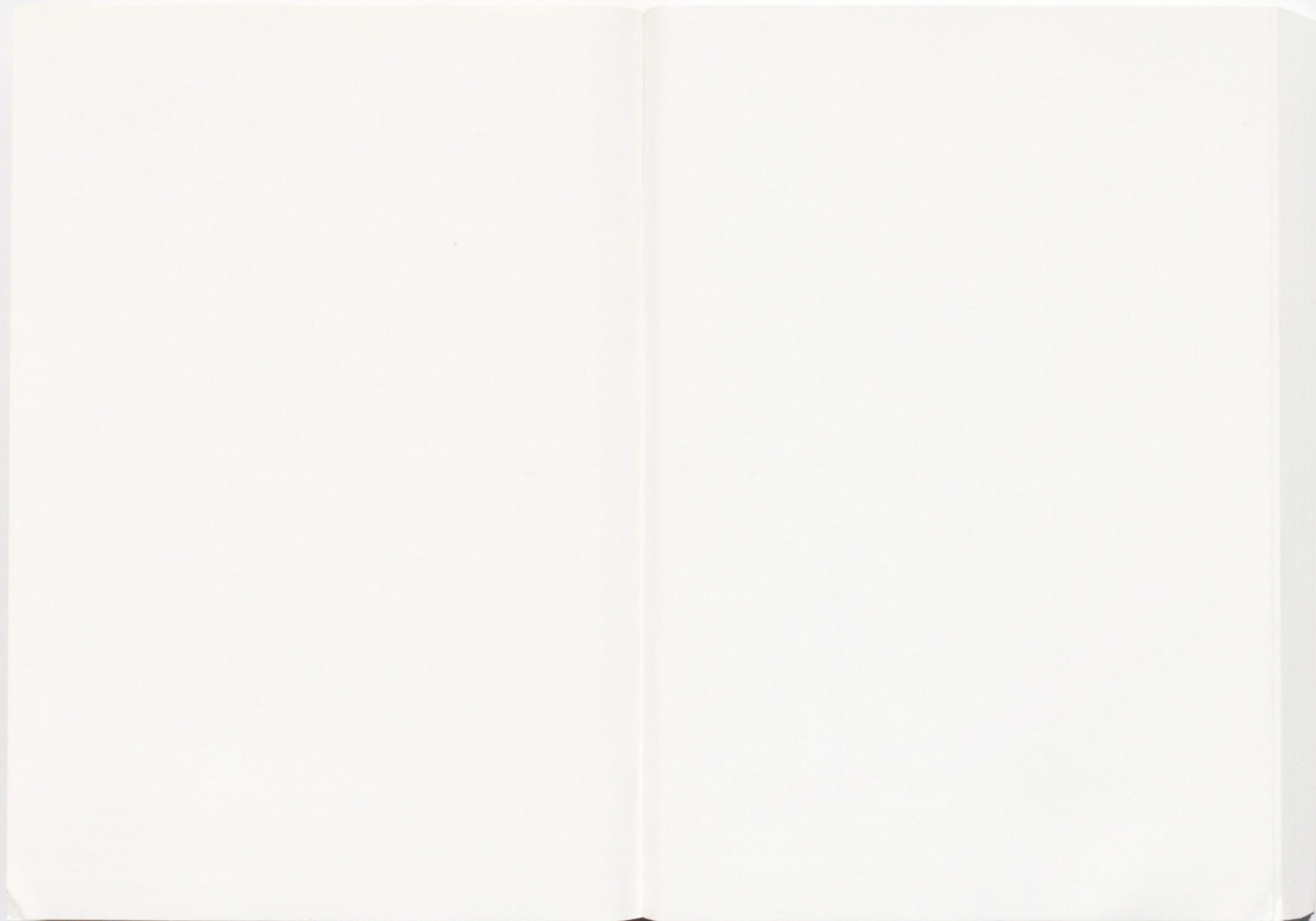
平成八年三月三十一日

編集発刊◎ 各務原市歴史民俗資料館

岐阜県各務原市鶴沼三ツ池町六丁目三二九
番(〇五八三)八三一―一―内線(四九九四)
郵便振替 〇〇八五〇一七三二 各務原市

印刷 西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町一五



名譽亭圖書館



112074158